「日本語会話のスタンス標識のはたらきの記述的検討」研究経過報告
―副詞「もう」を例として―

平成 30 年 4 月 19 日受付

増　田　将　伸*

要　旨

本研究では質問－応答連鎖内の日本語副詞「もう」を対象として，会話分析の手法を用いて会話中のスタンス標識のはたらきの記述的検討を行った。「もう」によるスタンス表示は，質問－応答連鎖内での「もう」の出現位置に応じて「当事者性の主張」「話す意志または内容がないことの主張」「質問の前提への抵抗」と様々であった。本研究の結果は，1 年間の研究期間内に得られた限定的なものではあるが，具体的で相互行為に根ざしたスタンス表示のはたらきを記述できる可能性を提示している。

キーワード：会話分析，相互行為，スタンス表示，当事者性，質問への抵抗

1. はじめに

発話に込められたスタンスの理解は，会話の参加者にとって重要な問題である。しばしば，発話の意味内容に加えて，発話に話者が込めたスタンスを理解しなくては，発話によってなされる行為を理解することができないからである。Heritage（1998）では，質問の受け手が応答の冒頭に間投詞 oh を加えることで，質問に問題があったということを表示できるということが示されている。(1) はその例である[1]。

(1)［Heritage（1998: 297)］

```
01   Jan: .t Okay now that's roas:' chick'n isn'it. th[at ]=
02   Ivy:                                             [It-]=
03   Jan: =[roasting chick'n<]
04   Ivy: =[   it  has  bee:n  ]cooked.
05         (.)
```

* 京都産業大学共通教育推進機構

06 Ivy: It's been co[oked.

07 Jan: [Iz ↑BEEN cooked.=

08 → Ivy: =Oh yes.

09 Jan: Oh well thaz good…

(1) では 8 行目の "yes" という応答の前に, 知識状態が変化したことを示す標識である "oh" (Heritage 1984) が付加されている。これは, (既に 5・7 行目で明言されたことに対する) 8 行目の確認要求が Ivy の注意の焦点を変化させたということを示すものである。このことは, 8 行目の確認要求が Ivy にとって予測できないものだったことを示し, 聞くまでもなくわかるはずのことに対してなされた確認要求を不適切とみなす Ivy のスタンスを示している。

「質問に問題があった」ことの表示には, この他にも, 不適切なタイミングで質問がなされたなど様々な要因が考えられるが, 問題があったことを標示することは, それらの要因の原因を作った質問者に対する異議申し立てとして認識されうる。このことは, 異議申し立ての発話形式を用いなくても, 応答の形式において意外性というスタンスを表示することで, 応答が別の行為 (異議申し立て) としてはたらきうることを示している。このようなスタンス標示は, oh のような間投詞だけではなく, 副詞を用いても行える (Clift 2001, Heinemann 2009)。

本研究では, 日本語副詞「もう」を対象として, 会話中のスタンス標識のはたらきの記述的検討を行った。研究としてはさらにデータを増やして検討することが必要な段階ではあるが, 平成 29 年度に行った範囲内でその概要を以下に報告する [2]。

2. 分析対象

分析対象としたデータは, 『日本語話し言葉コーパス』中のインタビュー音声 32 例 (二者対話, 各 10 ～ 15 分程度) である。質問に対して「もう」を発話冒頭付近に含む応答 21 例について, 会話分析の手法で分析を行った。質問－応答連鎖での用例を分析対象としたのは, 本研究が元々は「質問への異議申し立てを行う応答」という観点から出発したためである (増田 2013)。分析対象を発話冒頭「付近」にしたのは, 「もう」が発話の冒頭付近で多く用いられているものの, 発話の最初の語ではないことが多かったためである。具体的には, 本研究の分析対象には「もう」より前に「いや」「そうですね」などの反応トークンや, 質問の部分的反復が現れている発話が含まれている。

3. 分析

「もう」によるスタンス表示は, 質問－応答連鎖内での「もう」の出現位置に応じて, (2) のようになった。ただし, 現時点では (2) の B4 の例について説明ができておらず, (2) は, B4 以外の例も含めて今後修正が考えられる暫定的な内容である。

(2) 質問－応答連鎖内での出現位置に応じた日本語副詞「もう」のスタンス表示

A. 極性質問への応答

1. 肯定的応答（5 例）：当事者性の主張
2. 否定的応答（2 例）：話す意志または内容がないことの主張

B. 疑問語質問への応答

1. 当事者性の主張（2 例）
2. 応答準備の表示＋話す意志または内容がないことの主張（4 例）
3. 質問の前提への抵抗（2 例）
4. その他（現時点で説明できず，6 例）

3.1 節以降で，B4 以外の例について会話断片を示しながら論じる。以下の会話断片で，X と Y がインタビュアーで，他の参与者はインタビュイーである。

3.1. 極性質問への応答

3.1.1. 肯定的応答：当事者性の主張

(3)［D01F0046_0020-0030］

```
01    X: .hhh 旦那様は元々，.h あのテニスをなさってい[た(0.3)=
02    K:                                              [°hhh°
03    X:  =っ[ておっしゃ]ってましたが[ スポー]ツずき:°な[ん°ですか?]
04    K:     [はい.     ]            [あはい.]          [.hhh      ]=
05 → K: =え:: [もう] 高校時代ぐらいから[ずっと]テニスをしてま[して:.
06    X:                              [ ええ.]             [あ↑:::
07        なるほど
```

5 行目の K の応答は，X の質問（1 ～ 3 行目）の「スポーツ好き」という定式化と異なる，「高校時代ぐらいからずっとテニスをして」いたという定式化によってなされている。これは質問の定式化に抵抗する手段であり（Stivers & Hayashi, 2010），また，質問の対象である K の夫をよく知る者だからこそ可能な，具体的な内容の応答である。この応答を通じて K は，自分が質問の対象に関わる経験を有する当事者であることを表示している。

3.1.2. 否定的応答：話す意志または内容がないことの主張

以下の会話断片（4），(5）はそれぞれ，応答者が話す意志がないことを主張している例と，話す内容がないことを主張している例である。

(4)［D03M0053_0723-0730］

((L がファストフード店でアルバイトをしていたことについて話している。))

```
01    X: どの
02       (0.3)
03    X: ど-=>あ:ゆっちゃいけないんだ<
04       (0.6)
05    X: h[hhhh .hh  ((hhhhh は無声笑い))
06    L:   [hu
07       (.)
08    X: ケーとか¿
09       (0.6)
10 → L: i-(あ/や) もう:::
11       (.)
12    X: エム¿
13       (0.2)
```

X はどのファストフード店でアルバイトしていたか聞こうとするが, L は応答しない (1 ～ 2 行目)。X は応答を追求しようとするが，L が応答しない理由が，この会話がコーパスに収録されるため，実在企業の名称を挙げることを避けることに指向しているからだと思い当たる（3 行目)。そこで X は企業名のイニシャルを挙げて，名称を明示的に挙げない形で L がアルバイトしていた店を聞こうとするが（8 行目)，L はやはり回答[3]せず，回答の意志がないことを主張している（10 行目)。L に回答の意志がないことは，この断片の後で L が「大手 3 つの中のどれかです」と述べ，あくまでも企業名が特定されるのを避ける形で回答していることからもわかる。

(5)［D01F0003_0151-0204］

((H の母校である私立大学 YDU の入学試験は知能テストのような内容だということが話題になっている。))

```
01    X:  それ用に(0.2)じゃ[あ勉強したん[ですか?  ]
02 → H:                    [.hh        [や: もう ]特にそれ:(.)あの::s-
03       (0.4)
04    H: 地方の大学って>いう<のはもう国立いっぺん-(0.2)↓とう
05       [なん[ですよ.,]
06    X:  [.hh[ ° あ : ]:[:::°      ]
```

```
07    H:                    [.hh ですから]もう満遍なく何でも勉強してっ
08       [°*ていう:*°だ>から<特にワイディ[ーユー対策なん-(0.2)]て=
09    X: [    へ    え    :    :    [  ↑:  :  :      ]
10    H:  =やんなかった(ん).
```

YDU の独特な入学試験に備える勉強をしたかどうか尋ねる X に対して，H は「もう」を用いて応答を開始する（2 行目）。「もう」について論じる前に，いささか複雑なここでの応答のデザインについてまず述べておく。2 行目の短い間（.）の後で，H は応答のやり方を変えている。勉強したかどうかを直接答える前に，「地方では大学進学は専ら国立大学志向が強い」という背景を導入し（2 ～ 5 行目），その背景の結果と位置づけられる形で，YDU に備えた勉強は特にしなかったという回答をしている（7 ～ 10 行目）。背景の説明が応答の途中に挿入されたものの，この回答内容自体は 2 行目の時点で既に計画されていることが，2 行目と 8 行目でともに「特に」という語が現れていることからわかる。

YDU に備えた勉強をしていない H は，1 行目の X の質問への回答となる経験をもっていない。「もう」は，このように話せる内容がないというスタンスを表示している。

3.2. 疑問語質問への応答

3.2.1. 当事者性の主張

(6) [D03F0036_0322-0332]

```
01    X: .hh う[*わ:::*   それ  どう]なるんですか(.)肉離れっ[て.  ]
02    K:       [.hh う:んちょっとね.]                    [(.ch)]
03 →     [もう] ぶり(0.2)って:[ゆったとた]ん,.
04    X:                    [.hhh     ]
05       (0.2)
06    K: .hhh↓もううう[ごけなくて:*::*あ]し引いたまんまもう:*:*.
07    X:            [↑い::::↑た:い    ]
08       (0.5)
```

K は再現的で臨場感のある語りによって応答している（3 ～ 6 行目）。このような応答は，質問の対象について経験を有する者だからこそ可能なものであり，K の当事者としてのスタンスを表示している。

3.2.2. 応答準備の表示＋話す意志または内容がないことの主張

(7)［D03F0036_0035-0057］

((K はこの会話に先立って，コーパス収録のためにスピーチを行った。ここでは，その題材について話している。))

```
01    X：.hh 他に:[ 何 ]かこう>こう補に挙がったのはあったん=
02    K:          [うん]
03        =で[す°(か)°< .h]
04    K：    [.hhh         ]ほ<↑かですかね:>↓う:::ん<自>分の結婚式ぐらい
05        です[かね::  ]
06    X:      [↑あ::ど]ちらでされたんです°°か°°=
07 → K：=そ↑れは↑ [もう::]
08       安いとこで:[:¥や(h)っ]↑た(h)んですけど:?¥ [.hh ]
09    X:           [a(h)h    ](°°-------°°).h .h[h¥横]浜:¥=
                   ((--部で笑っているような横隔膜振動音がかすかに聞こえる))
10    K：=>↑いえいえいえいえいえい[え     ]<あの:::どこだ¿
11    X:                         [°°え°°]
12        (0.2)
13    K: °あのね:どこだっけ°.hhh う:::んと>もう<都内です:=
```

6 行目で X は, K が結婚式を挙げた場所を尋ねている。これは K が当然知っている事柄のはずだが, K は 13 行目に至ってもはっきりとした回答をしない。「もう」はこのような応答意志の欠如を表示している。

(8)［D01M0019_0703-0711］

```
01    Y: °°.hh°°その:(0.2) 1 年で出て<っ(て).>
02        (0.4)
03    D: え[え.
04    Y:   [そのあとはどういう*:*アパートに住んで[たんですか?]
05 → D:                                           [そのあとは] [もう] 六畳の.
06        (0.6)
07    Y: °ふ:ん.°=
08    D: =普通の.
09        (0.2)
```

YはDが住んでいたアパートについて尋ねているが（4行目），それに対するDの応答は「六畳の」というものである。8行目で「普通の」と付け加えられていることからもわかるとおり，六畳一間のアパートはありふれており，とりたてて話題になるようなものではない。このように，質問の対象について話すべき内容がないことが「もう」を用いて表示されている。

また，この応答（5行目）の冒頭では，質問発話（4行目）の一部を構成する語句「そのあとは」が反復されている。このように先行発話の一部を反復することは，話者が発話を準備している途中にあることを表示している（Bolden, 2009）。このように，応答の準備を示した後に「もう」が発話されるというのも，疑問語質問への応答で，話す意志または内容がないことの主張が「もう」を用いてなされている例の特徴である。発話断片（7）の応答（7行目）の「それは」についても同様に考えられる。

3.2.3. 質問の前提への抵抗

(9)［D03F0034_0506-0512］

```
01     X: ↑何人ぐらいなんですかその学会っ°て.°
02        (0.3)
03  → J: いや:m [もう] (0.4)全然まちまち:ですね.
04     X: ふ:ん
```

「何人ぐらいですか」というXの質問（1行目）は，「学会の人数は～人」という形で回答がなされることを想定した形式である。しかし，学会の規模によって参加者数はまちまちであり，単純に「学会の人数は～人」という形で回答することは難しい。(9) では，質問形式からうかがわれるこのような前提への抵抗が「もう」を用いて表示されている。

4. まとめ

本研究では日本語副詞「もう」を対象として，会話中のスタンス標識のはたらきの記述的検討を行った。「もう」によるスタンス表示は，質問－応答連鎖内での「もう」の出現位置に応じて「当事者性の主張」「話す意志または内容がないことの主張」「質問の前提への抵抗」と様々であった。本研究の結果は，具体的で相互行為に根ざしたスタンス表示のはたらきを記述できる可能性を提示している。ただし，データの追加や，考察が不十分な例の検討を通して，今後記述を精緻化する必要がある。

トランスクリプション記号一覧

=	間を置かない発話順番の移行，または同一話者による発話の継続
[	発話の重なりの開始点
]	発話の重なりの終了点

:	音の引き延ばし（: が多いほど長い）
言葉 -	言いさし
(数)	沈黙（数は秒単位で長さを表す）
(.)	マイクロポーズ（0.2 秒未満の沈黙）
h	呼気または笑い（h が多いほど長い）
.h	吸気（h が多いほど長い）
言(h)葉	呼気または笑いを含んで発話されている言葉
↑言葉	語頭の上昇音調
↓言葉	語頭の下降音調
?	発話末尾の上昇音調（疑問符ではない）
¿	発話末尾の上昇音調（? より上昇幅が小さい）
> 言葉 <	速い言葉
< 言葉 >	ゆっくりした言葉
言葉	強勢が置かれた言葉
°言葉°	小さな声の言葉（° が多いほど小さい）
¥言葉¥	笑っているような声色の言葉
* 言葉 *	しわがれ声の言葉
(言葉)	聞き取りが不確かな言葉
(言葉 / 言葉)	確定できない聞き取りの候補
((言葉))	著者による注釈
→	分析の対象である行

注

1 会話例の書き起こし断片に用いられている記号については，本稿末のトランスクリプション記号一覧を参照されたい。

2 本稿は増田（2018）を基にしている。また，今後の検討に活用できる追加データの整備を京都産業大学平成29年度特定課題研究（準備研究支援）「日本語会話のスタンス標識のはたらきの記述的検討―意味論と語用論の交点として―」（研究代表者：増田将伸）により行うことができた。記して感謝する。

3 本稿では，質問された内容に答える発話を「回答（answer）」，回答に限らず質問発話に応じてなされる何らかの発話を「応答（response）」として区別している。

参考文献

Bolden, G.（2009）Beyond answering: Repeat-prefaced responses in conversation. *Communication Monographs*, 76（2）, 121-143.

Clift, R.（2001）Meaning in interaction: The case of ‘actually.’ *Language*, 77（2）, 245-291.

Heinemann, T.（2009）Two answers to inapposite inquiries. In: Sidnell, J（Ed.）, *Conversation Analysis: Comparative Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.159-186.

Heritage, J.（1984）A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In: Atkinson, J. M. and Heritage, J.（Eds.）*Structures of Social Action*. Cambridge : Cambridge University Press. pp.299-345.

Heritage, J.（1998）Oh-prefaced responses to inquiry. *Language in Society*, 27, 291-334.

増田将伸（2013）ターン冒頭部に「もう」を含む発話の相互行為上のはたらき―質問に対する応答の分析から―. 社会言語科学会第 31 回大会発表論文集 . 46-49.

増田将伸（2018）副詞「もう」による強調の表示についての予備的考察 . シンポジウム「日常会話コーパス III」（2018 年 3 月 19 日，於 国立国語研究所）ポスター発表 .

Stivers, T. and Hayashi, M.（2010）Transformative answers: One way to resist a question's constraints. *Language in Society*, 39（1）, 1-25.

Descriptive Consideration on Stance Marking in Japanese Conversation: Research Progress Report on a Case of Japanese Adverb *Moo*

Masanobu MASUDA

Abstract

The present study has discussed stance marking in conversation through conversation analytic description on Japanese adverb *moo* in question-response sequences. Stance marking with *moo* varies according to *moo*'s positions in sequences, and chiefly displays concerned party-ship, lack of intention or contents to speak, or resistance to presupposition to questions. This study, though it is still in progress, proposes the possibility of description on concrete stance marking in interaction.

Keywords : conversation analysis, interaction, stance marking, concerned party-ship, resistance to questions